

「切れ」からはじめる俳句の創作指導

著者	石塚 修
著者別名	Ishizuka Osamu
雑誌名	人文学教育研究
巻	40
ページ	41-48
発行年	2013-08-13
URL	http://doi.org/10.15068/00123504

「切れ」からはじめる俳句の創作指導

著者	石塚 修
雑誌名	人文学教育研究
巻	40
ページ	41-48
発行年	2013-08-13
URL	http://doi.org/10.15068/00123504

「切れ」からはじめる俳句の創作指導

著者	石塚 修
雑誌名	人文学教育研究
号	40
ページ	41-48
発行年	2013-08-13
その他のタイトル	Research on the lesson about "KIRE" which is needed when creating a haiku poem
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123504

「切れ」からはじめる俳句の創作指導

石 塚 修

はじめに

俳句についての指導は、藤井罔彦によれば、1945年以降検定教科書において小学校6年生で1単元が設定されて以来現在まで継続して単元が設定されているように、小中高校を通じて指導されている国語科の教科内容を代表するジャンルの一つとなっているけれども、その多くは鑑賞に重点が置かれた指導になっていることが現状のようである。^①ただし、画一化する俳句の授業にたいし、鳴島甫の実践のように俳句そのものにまず学習者を向きあわせ、そこから俳句のレトリックの本質を発見させるという実践^②などもあり、工夫を模索している傾向もあるが、全体としては俳句の授業のパターン化は否めないのではなかろうか。

藤井罔彦は、平成に入り、ゆとりの時間や総合活動との内容との関係性から、俳句が急にいろいろな形で授業に取り入れられるようになり、

○俳句の指導の目標・内容・方法・評価という体系的な指導計画のないまま、いきなり俳句の授業が始まってしまった。

○俳句の読み方も作り方も知らない教師が、児童生徒に俳句を作らせるという授業があちこちで見られるようになった。

という異常な事態が生じることになったことを指摘する。^③

さらに、藤井は平成23年度から実施の学習指導要領に小学校高学年「書くこと」の言語活動例に、

ア 経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること。

が取り入れられたことで、俳句指導のいっそうの改革が求められているとも指摘する。

俳句指導の基本的な内容として、藤井は「①リズムと調べ ②季語の働き ③切れ字の用法 ④感性の錬磨」をあげ、そのうえで最終的には句会や句集作りを児童生徒にさせることを目標として提示している。^④規工川佑輔も「無理に作句をする必要はないが、教室の生徒たちは案外興味を持って参加するものである。気軽な態度で一度ぐらゐは俳句作りの手ほどきをしてやるべきであろう」と述べ、「俳句は短く形式が一定しているので形としては比較的容易にできる」としている。^⑤

この藤井と規工川の見解の相違こそ、まさに俳句指導に関する教室の混乱ぶりを反映しているといえる。藤井の見解は、藤井自身が俳人としてのキャリアを持つ立場からの発言であり、規工川の見解は、俳句指導にあたる国語教師たちの多くは、生徒に創作の指導はしているものの、自

身では作句の経験すらないことを前提としている。水泳ができない体育教師や音譜を読めない音楽教師が、プール指導をしたり、合唱指導をすることはありえない。にもかかわらず、俳句指導に関しては、多くの教師が俳句が作れないにもかかわらず、創作まで平然と指導してしまうのである。このことは、日本語を五七五に並べられれば、あたかも「気軽に」俳句指導ができてしまうかのような雰囲気が、国語教室に確実に存在しているからであろう。

そのことは、実際に俳句指導を受けてきた生徒たちの声からもわかる。以下は、平成24年9月に青森県立青森東高等学校で筆者が実践した「文学を〈読む〉・文学を〈創る〉」という俳句をテーマとした出張講義の受講後に提出してもらった生徒たちの感想の一部である。(波線部は筆者)

正直、今までは「俳句」がどんなものなのかよく知らなかったし、「俳句を作りなさい」と言われてもピンとこなかった。見たままあるがままだけの普通の俳句を作ってしまうことが多かったと思う。しかし、俳句として成立するには、日常中の「発見」こそが大切だと学んだので、今後は、もっと「日常」に目を向け、積極的になっていきたいと思う。
(Y.K・女・1年)

文学についての興味深い話がたくさん聞けた。例えば俳句は中学校などで習ったことがあったが、「見たままを書く」といわれてもよく分からなかったし、季語や切れ字はいれないと俳句にならないと教わっていたのできゅうくつでおもしろ味のないものだと思っていた。今日の講義を聞いて、俳句についての見方が変わった。十七音の内には、考えられて選ばれた言葉が入っているとわかった。また、思っていたよりも自由なものだということもわかった。日本のすばらしい文化である俳句についてももっと知りたい。
(A.O・女・2年)

俳句は思っていたより自由なものだと思った。俳句が成立するには「発見」が大切というのには、俳句は季節の雰囲気を詠むだけだと思っていたので驚いた。発見と想像力は、生きていくのに大切だと思うので、養っていきたい。
(S.S・女・2年)

とても内容が濃い、面白い講義でした。中学校では俳句のルールを十七音と季語しか習わなかったので切れ字を入れるというのがとても驚きでした。外国でも俳句が人気だというのは少し意外でした。俳句の為には日本語が分からなければいけないと思うからです。俳句は学校の授業でしか書いたことはありませんが、これから少し書いてみようかと思えます。
(H.N・女・2年)

とくに波線部から、現在おそらく多くの教室でなされている俳句指導の実態がうかがえる。俳句における「写生」を、むやみに強調しすぎた結果、生徒たちは俳句は「見たまま」を詠むもの

だと思いきみ、むしろ「見たまま」に詠まないと俳句にならないと、かたくなに考えてしまっている実態が垣間見える。「季語」についても、理由も明確にされないままにクイズのように季語と季節を結びつける一問一答形式で指導され、実感のない「季語」をただ知識として覚え込まされて、句の創作の際に句に詠みこむことを強要されたため、「俳句」は「季語」というステレオタイプの理解に陥ってしまっている。その結果、創作に向かうどころか、俳句の存在を難しいものとして敬遠している生徒たちの姿勢さえ感じられる。

国語科で創作が重視されるなか、俳句はその詩形や社会的な普及度から見ても、身近に創作活動を促せる文芸として、学習材としての可能性を秘めていることは事実である。しかし、先ほどの生徒たちの声からもうかがえるように、安易な創作の授業を小中高校と繰り返した結果、むしろ生徒たちからは創作の難しい文芸として見られてしまっているようでもある。では、俳句指導にどのような方策を加味すれば、そうした抵抗感をやわらげ、より魅力的な存在として生徒たちに受けいれられ、積極的な創作をうながせるようになるのか、そのことについて以下で考察していきたい。

俳句指導における「切れ」指導のあり方

『俳文学大辞典』には「切れ」と「切れ字」とは別項目が立てられている。国語の教室では案外このことが混乱して児童生徒に伝えられてはいないだろうか。

ちなみに「切れ」とは、

俳諧用語。一句の中で強く言い切られているところ。俳句は短いために、ただ言い続けたのでは、文の断片としか感じられない場合がある。一句の自立する効果を上げるためには句の途中あるいは句末を言い切ることによって、そこに詠嘆の気持ちを込めることが有効である。俳諧の発句は、代表的な切字「や」「かな」「けり」を多用して切れの効果を上げたが、近代俳句においてそれらは古臭いと感じられ、避けられることが多かった。当然に句の切れが悪くなるので、伝統的な切字を用いずに句を着ることが必要になった。……（山下一海）

とあり、「切れ字」は、

連俳・俳句用語。発句が独立性を有するために、句末や句中に用いて切れる働きをする助詞・助動詞などをいう。……近代俳句では、名詞で切れる場合も言うことがあるが、中世・近世の連歌論・俳論では、切れるとはするが、切字とはいわない。

……（宮脇真彦）⁶⁰

と区別して説明されている。国語の教室でこれらの項目の指導に混乱があるのは、松尾芭蕉の発句と正岡子規の俳句がときに同列に扱われ、教師も時代背景を無視して、これらを同じ性質の文芸として説明してしまっていることによるのではなからうか。かりに文学史的な説明を教師ができたとしても、児童・生徒にその差異を明確に理解させることは容易ではないことも事実である。

俳句と川柳は「伝統的な言語文化」の好例として、しばしば学習材に取りあげられるが、その

差異についての説明となると、川柳は季語が不要であるとか、内容が世態風俗を扱い風刺がきいているという程度の解説が主になっているようである。しかし、復本一郎は「俳句のルーツは発句であり、川柳のルーツは平句である。俳句と川柳は、構造的にそれぞれ異なる発生の仕方をしているのである」⁷⁾と指摘する。この説をもって俳句と川柳のすべてを区別できるとは言い難いかもしれないが、この説を利用すれば、ともすれば起こりかねない教室での俳諧（俳句）と川柳との混乱は避けられるのではなからうか。復本はさらに俳句と川柳の決定的な差異について、

それならば、次に、発句と平句の違いはどこにあったのであろうか。発句は、季語と切字（切れ）を必須の条件としたが、平句は季語を必ずしも必要としなかったし、切字（切れ）を断固拒絶する文芸だったのである。すなわち、季語のある川柳は存在し得るが、切字（切れ）のある川柳は存在しない。切字（切れ）があっては川柳の面白みがなくなってしまうからである。わかりやすさや論理性は川柳の大きな魅力であるが、切字（切れ）が入ったとたんに、そんな川柳の魅力がなくなってしまう。⁸⁾

と述べる。この説明は明瞭であり、児童・生徒に俳句と川柳の差異をわかりやすく説明するには好適である。

この指摘から、俳句の指導では「切字（切れ）」の指導を「季語」の指導以上に重要視すべきだと考える。もちろん、近代俳句ではかならずしも「切字」が要求されるわけではないので、俳諧の発句と近代俳句では「切れ」に負わされている文学的な意味の重さが異なることはいうまでもない。しかし、夏井いつき・三浦和尚が小学校を中心に俳句創作を指導する「句会ライブ」では、小学生など俳句の初学者には「二句一章」の取り合わせ句が創作しやすいとしている。⁹⁾この「二句一章」では「切れ字」を用いて上五（初句）または中七（二句）切れで創作するのが簡便な創作方法とされる。この方法の有効性を考えると、俳句の創作指導では、五七五の定型に次いで「季語」よりも先に「切字（切れ）」を指導し、「切れ字」を使い「切れ」を持った「二句一章」仕立ての俳句をまずは創作できるようにする指導が優先されるべきである。ところが、先に示した藤井の指導でもそうであったように、これまでは「③切れ字の用法」はあくまでも指導内容として示され、「切れ字」そのものを文法的に取りたてて指導する傾向が強かった。大切なのは「文法的用法」の指導ではなく、まずは児童・生徒に五七五の句を「切る」ことへの意識を持たせ、「切（れ）字」はそのための必然として存在していることを理解させることであろう。

切字はともすると、詠むためというよりも、鑑賞の際のいわば俳句の見どころ的な存在として指導されきた¹⁰⁾。しかし「読む」ためより、「詠む」ための「切字（切れ）」の指導こそが意識的になされるべきであろう。

「切れ」指導の実際と課題

出張講義 「文学を読む・文学を創る」
日 時 平成24年9月13日（金）
ところ 青森県立青森東高等学校

対象生徒 1年生・2年生 約50名

授業の概要 和語・漢語・カタカナ語からなりたっている日本語についての説明と、さらに日本語には雅語と俗語があり、俳諧は俗語により詠まれた文芸であることを説明した。そのうえで、松尾芭蕉「古池やかはづ飛びこむ水の音」の句がなぜ名作と称されるのかを、用語のうえから説明し、和歌の伝統では「かはづ」は「山吹」と〈取り合わせ〉られることが一般的であり、先の句が、そうした和歌の伝統を新たな世界に作りかえた点で文学史的意味を持つことを解説した。予備学習として、各自で季節の句を一句創作していただくことを指示しておいた。

以下の表は、その予備学習での生徒たちの実作である。この表を通覧するとわかるとおり、生徒たちはただ俳句を作れという、2「秋の夜 腹いっぱいだ 梨たべて」とあるような、いわゆる「一物仕立て」の句⁽⁴⁾を作る傾向が見られる。この傾向は、「あるがまま見たまを詠め」という指導が、かえって生徒たちにとっては、ただなんとなく見たまを詠むのが俳句だという誤解を与えていることにもつながっている可能性を示唆している。こうした生徒たちの俳句観は、俳句の「読むこと」の指導においても注意しておくべき点であろう。(破線は季節を表す語が重複している句)

	初作	「切れ」を意識させての改作
1	秋風と 稲穂が作る 金の波	秋風や 稲が生み出す 金の波
2	秋の夜 腹いっぱいだ 梨たべて	秋風や お腹を満たす 果実臭
3	日の入りに 空飛び回る 赤とんぼ	夕暮れ時 止むこと知らぬかな 鈴虫の声
4	山の葉で 染まる津軽は 林檎色	山の葉や 染まる津軽は 林檎色
5	秋風と 稲穂であそぶ すずめたち	秋の空 稲穂とあそぶ すずめかな
6	頭垂れ かがやく稲穂 かがね色	頭垂れ かがねに輝く 稲穂かな
7	実りの秋 りんごみたいな 赤いほお	実りの秋 林檎のように ほお染まる
8	窓の外 響くコオロギ 秋が来る	窓の外 秋が来るのか コオロギや
9	秋桜 空に向かって 背のびする	吹きわたる 風のゆくえや 秋桜
10	吹きわたる 風にゆられて 秋桜	
11	金色の 稲ほ輝く 通学路	向かい道 金色光る 稲ほかな
12	紅と金 津軽の田畑 夢染まる	紅と金 夢染まるのは 津軽かな
13	秋風に 揺れる稲穂は 黄金色	秋風や 揺れて稲穂が くすぐったい
14	夕日浴び 光輝く 真っ赤な実	夕日浴び 茜に染まる りんごかな
15	りんごでき 津軽の秋が やってくる	りんごでき 津軽の秋が くるのかな
16	夕焼けに 照らされふわり ゆれる稲	夕焼けや とんぼが止まり ゆれる稲
17	夕焼けで いっそう染まる 赤りんご	
18	すすきの穂 月に照らされ さらさらと	すすきの穂 傍にるのは 鈴虫か
19	紅葉より 赤く色付く りんごの実	紅葉より 赤く色付く りんごかな
20	きらきらと 艶めく林檎が 実る秋	きらきらと 実るは艶めく 林檎かな
21	風にゆれ おちるもみじが ひらひらと	風にゆれ ひらひらおちる もみじかな
22	満月の 月の光りが 差しこんで	満月や 月の光りが 差しこんで
23	稲穂ゆれ 感じる秋に 心ゆれ	
24	虫の声 夜風にながれ 耳にする	窓の外 音だけ聞こえる 虫祭り

25	暑さ過ぎ 揺れる稲穂は 黄金色	秋風や 揺れる稲穂は 黄金色
26	一面に 紅葉がいっぱい 落ちている	一面に 落ちているのは 紅葉かな
27	青森の 秋を彩る りんごの木	青森の 秋を彩る りんごかな
28	秋の空 とんぼとりした 幼少期	とんぼかな 思い出された 幼少期
29	水面が 茜に染まる 秋の夕暮	水面が 茜に染まる 夕暮れかな
30	あかりんご 口に広がる ビタミンC	あかりんご 口に広がる 秋のかほり
31	赤い実が 秋の訪れ 告げるかな	少しずつ りんごが赤に 染まるかな
32	十和田湖に 燃え揺らく葉の 灰白く	十和田湖や 燃える紅葉の 灰白く
33	秋の日の 夕日に染まる 林檎かな	
34	赤とんぼ 夕日に溶ける 赤い色	赤い色 夕日に溶ける とんぼかな
35	星空に 花火と消える かねの音	夜の空 遠ざかっていく 囃子かな
36	大輪の 花と消えゆく 囃子かな	
37	アカトンボ 夕日やりんごと 色競べ	夕焼けと 色競べする りんごかな
38	そろそろか 津軽三味線 秋の音	そろそろかな 津軽三味線 秋の音
39	秋風の 色にそまりし 子供たち	秋風の 色にそまりし 子供たち
40	金色の 津軽の風に 揺れる稲	秋風に 揺れる津軽の 稲穂かな
41	紅葉と 夕日に染まる 秋の街	木枯らしや 銀杏に秋 感じけり
42	木枯らしや 銀杏のにおい 秋感ず	
43	秋風に 吹かれてなびく 君の髪	秋風や 吹かれてなびく 君の髪
44	夕暮れに 手をとり帰る 冬隣	夕暮れや 手をとり帰る 冬隣
45	夕ぐれに 染まる紅葉の 万華鏡	夕ぐれや 輝く紅葉の 万華鏡
46	自転車で のぼる坂道 とんぼとぶ	行く道に 落ちてる葉の色 りんごかな
47	通学路 落ちてる葉っぱ りんご色	
48	りんご園 色とりどりの 実がなるよ	りんごかな 赤や黄色の 実が踊る
49	ああ赤い 真っ赤なりんご おいしそう	あありんご 食欲誘う 赤さかな
50	紅葉で 秋のおとずれ 実感し	紅葉は 秋の知らせの 便りかな
51	そよそよと 誰に手をふる すすきの穂	赤とんぼ 君まで手から 逃げるのか

俳句の「切れ」について解説して、「切れ」を意識して改作するように指示を与えた結果が、表の右側である。1時間だけの模擬講義での指導であるので、「一物仕立て」と「二句一章」の十分な解説までできなかったため、1や4の句のように、多くの生徒は「切れ字」をただどこかに入れる程度の改作になってしまっていることは否めない。ただし、生徒たちが「切れ」を意識したか否かを、指導の前後で比較してみると、次のようになる。

〈指導前〉は、

初句切れ 28 34 38 42

二句切れ 4 10 13 46 47

句切れなし 1 2 3 5 6 7 8 9 10 12 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

26 27 30 31 32 33 35 36 40 41 43 44 45 48 49 50 51

となっており、しかも「や」で切っているのは43のみである。

それにたいして、〈指導後〉は、

初句切れ 1 2 4 5 7 11 13 16 22 25 28 32 35 38 41 43 44 45 48 49 51

二句切れ 3 8 9 12 26

句切れなし 6 14 15 18 19 20 21 24 27 29 30 31 34 37 36 39 40 46 50

という結果となり、句切れなしの句が39句から19句に減少し、初句切れが4句から21句に増加している。これはあきらかに生徒たちが「句切れ」を意識したためであると推測できる。さらに、切れ字の「や」を用いて、初句で切っている句が指導前には1句であったものが10句になった。

このことは、国語の授業で俳句の創作にとりくむ場合に、やはり「一物仕立て」の写生句よりも、「二句一章」の取り合わせ句が作りやすいことを示しているのではなからうか。

今回の授業内では、適切な「季語」の指導まで至れなかったため、季重なりの句が、

初作季重なり 1 2 5 7 8 13 15 16 17 18 19 20 23 28 33 37 41 42 50

改作季重なり 1 5 7 8 13 15 16 17 18 19 23 25 33 34 37 41 42 50

となってしまい、指導の前後でも改善が見られなかった。これは授業者が季語を一つにして切れ字を用いるようにとの指示をしなかったための結果であり、今後の課題としたいと考えている。「二句一章」として完成した俳句になるまでの創作活動をさせられなかったことも反省点として残るが、俳句指導で初心者に適しているとされる「二句一章」による創作活動をおこなう場合において、学習者には俳句の「切れ」をまず意識させることが重要であることが確認できた。

系統的な俳句の創作指導の実践のためには、指導者は「切れ字」のはたす役割を早い段階で学習者に理解させ、活用できるようにしておくべきである。

*本稿は、科学研究補助費〔基盤研究(C)研究課題番号：23531156 高大接続場面における「小論文」等を契機とする文章表現の学習に関する研究 代表 島田康行〕の研究成果の一部である。

注

- (1) 藤井園彦「俳諧，俳句」日本国語教育学会編『国語教育辞典』（朝倉書店 2001）p.311
- (2) 鳴島甫『俳句による“レトリック”原点からの指導』（大修館書店 1994）
- (3) 藤井園彦・習志野市立大久保小学校国語科研究室『言葉の力をつける俳句単元の計画と指導』（明治図書出版 2008）p.12
- (4) 1に同じ。
- (5) 規工川佑輔「俳句」国語教育研究所編『国語教育大辞典』（明治図書出版 1991）p.660
- (6) 尾形佑ほか編『俳文学大辞典』（角川学芸出版 2008）p.233
- (7) 復本一郎『俳句と川柳』（講談社現代新書 2000）p.34
- (8) 復本一郎『俳句と川柳』（講談社現代新書 2000）p.109
- (9) 三浦和尚・夏井いつき編『俳句の授業ができる本』2011 三省堂
- (10) 藤原マリ子「俳句の鑑賞指導と『切れ字』—切れ字の機能構造論からの検討」『早稲田大学国語教育研究』31（早稲田大学国語教育学会 2011）
藤田万喜子「言語感覚を磨く俳句の指導『切れ』を意識して」『岐阜聖徳学園大学国語国文

学』27（岐阜聖徳学園 2008）

- (11) 一つの材料だけで一句をつくる句作法。取り合せ（配合）の方法に対する。「鶏頭の十四五本もありぬべし」（正岡子規）……のように、主として季語を中心の材料として、息が一本に通り、かえって俳句独自の余韻と味わいを出す句法で、名句に多く見られる手法である。（平井照敏）『俳文学大辞典』（角川学芸出版 2008）